

## 審査員長 講評

川上 元美（デザイナー）

一貫したテーマである「雪と氷」という自然と科学の主題のもと、幅広いジャンルから様々な素材や表現による応募作品が寄せられるのが、公募展「雪のデザイン賞」の特徴であり面白さでもあります。審査は初回から一貫して画像での一次審査と現物での二次審査にて行っていますが、二つのポイントが毎回の審査で大きな軸になってきたように思われます。

まず、「雪と氷」を単にモチーフとして取り込むのではなく、このテーマを応募者がどう受け止め、解釈して作品に繋げているかという点です。もちろん、その思いを形にするために選んだ手法や表現が、見る者を納得させることも重要でしょう。そして、このテーマに対し「このような受け止め方や、伝え方があったのか」と、審査する側を驚かせてくれる魅力を少なからず持っている点です。

かつて中谷宇吉郎は、自然科学者の目で雪の結晶の多様性を研究し、人々に感動を与えました。宇吉郎が魅せられた「雪と氷」の世界に対する応募者の取り組みとともに、この雪の科学館で展示されることも意識した丁寧な仕事が行なわれているかも、しばしば論点となります。そのため、着眼点や発想に心惹かれる点があっても、完成度がもう少し高ければ入選や受賞に達したと思われる作品もありました。

さて、第9回を迎えた「雪のデザイン賞」には、全国から192点の応募がありました。惜しくも入選は逃しましたが、海外在住の方からも応募があったことは喜ばしいことです。その中から1次審査で34点の入選を決定し、二次審査で各賞を決定しました。その中でも、下記しました上位3作品が特に優れていたと思います。

### ○金賞《降る夜》

この器は、陶磁器の技法の一つである蚩手（ほたるで）により、薄い磁器から光を通して繊細な文様が浮かび上がります。光によって変わる器の表情の豊かさがこの技法の大きな特徴ですが、それを存分に活かした点描のような彫りをいくつかのパターンに仕立て、精緻に組み合わせています。里山にも街並みにも、そして光によって昼にも夜にも見える雪景色へと、次々に想像が広がっていく逸品です。小さな器の精緻な細工だからこそ生まれる豊かな世界に、審査員が惹きつけられました。

### ○銀賞《虹の氷柱》

氷柱をイメージした小さなガラスのペーパーウエイトですが、受ける光や見る角度によって、プリズムのような色の変化をガラスの内部に湛え、雪と氷がつくる美しい自然現象に出会った時の純粋な驚きや喜びが湧きあがります。

ガラスの塊の下にラメのような細かい千切を施したことで生まれる現象は、偶然の発見なのでしょうか。発見の喜びが魅力的な表現に繋がっているならば、それは自然科学での発見の喜びという宇吉郎の世界に通じているといえるでしょう。

### ○銅賞《つぎつぎになりゆくいきほひ》

作者によると、タイトルは思想史家の丸山眞男の言葉からの引用であり、物事に対して主体的に働きかけず、自然の成り行きや勢いに任せるといふ日本人の歴史的な意識について表した言葉の一つであるようです。それを雪と氷の世界の成り立ちという自然現象と重ねつつ、雪の結晶のフラクタルパターンを3次元に表現した作品に繋がった点が興味深い作品です。言葉、自然科学、表現という繋がりや、随筆家でもあった宇吉郎の活動への共感とも捉えることができます。

デジタルのメディアやツールを用いて表現した作品は毎回見られますが、自然現象としての雪と氷の世界への作者の関心と解釈が伝わる作品です。この点を宇吉郎の直弟子である樋口敬二審査員が特に評価していました。

初回から先回までの受賞者の中にはその後、それぞれのジャンル、特に工芸やクラフトの領域で更に大きな受賞や作品発表を重ね、成長している方もでてきています。

「雪と氷」というユニークなテーマを超越した視点からも作品への評価が生まれ、展示などを通して人々の目に触れることは、応募者にとって大きな励みや機会となっているでしょう。

これまで寄せられた作品を、「雪と氷」というテーマ、ひいては宇吉郎の業績や思考への“手紙”のように捉えるならば、回を重ねる中で生まれた応募者の方たちと雪の科学館との繋がりは、一つの財産であると思います。この繋がりを作品に託された思いを、今後の開催や活動のなかでどう生かし、繋げていくかが主催側に問われる課題でしょう。